

第5回検討委員会の意見まとめ

令和4年7月12日
学校・家庭・地域の協働体制検討委員会
資料1

発言分野	No.	内容	中間まとめ（案） P.
教員の多忙の実態	1	検討委員会の目的として、「先生方は大変である。忙しい。子どもに目が行き届いていない。そういうところをどう保護者、地域と一緒に頑張って解決していくか」というような目的だったのではない。学校の現状の問題や先生が何で忙しいのかがよくわからない。問題ははっきりさせた上で議論することによって、物事は進むのではないのか。	1,2
	2	「検討の背景」の（1）が教育とは理念的なところから入る分野だなということを感じている。（2）の「学校を取り巻く状況」について具体的に見える化されてこの中間報告書に入ってくるものなのか。	
	3	実情を考慮して書き記すことになるのではないのか。	
学校の多忙化解消・負担軽減	4	現状では、開かれた学校づくり協議会には、進路指導主任、生活指導主任、教務主任の先生方も入っている。教員の働き方改革の話も含めて始まったこの協議会だったにもかかわらず、これが4回から、さらに8回まで増えるということは何か逆行しているような気がする。	3,4,5,10,13,15
	5	何が忙しいのか、何が大変なのかということを明らかにしていくのも大事だし、教員もそこを変えていくには何ができるのかということを考えていかなければいけない。	
	6	そもそもの出発点は、学校だけで解決できない様々な課題を地域全体でどう子どもを育てていくかということ。相互理解のためのプラットフォームが、この新しい開かれた学校づくり協議会。回数が増えることで、学校のほうでまた負担が増えてしまうということはあってはいけない。	
	7	何でもかんでもやってほしいということを言う場ではなくて、学校の先生方の状況も把握して、「これは無理じゃないか、ならば、やめましょう」ということを言うことがすごく重要。僕らができることは僕らがやりますということも大事。だけれども、「もうできない、全部先生に押しつけてきたけれども、それは無理」というのもわかっていただけたら、やめようということをみんなで考え、決める場にもなる。	
協議会と地域コーディネーターの役割	8	地域コーディネーターや開かれた学校づくり協議会というのも、関わっている人はわかっているけれども、関わっていない人は何も知られていない現状なので、その2つの組織が今回一緒に頑張って大きく活躍できるというのはすごくいいことだと思う。	4,5,11
協議会の広報	9	協議会を知ってもらうためにどういう活動ができるのか。あと先生たちにとってそれが応援隊になれるのだったら、ぜひ活躍していただきたいと思うが、具体的にどんなふうになるのか見当がつかないので、今ある開かれた学校づくり協議会とどこがどう変わっていくのかというのをもう少し詳しく知りたい。	4,5,11
	10	P T Aに関わっている人たちが「開かれた学校づくり協議会」を知らないということは非常に残念。P T Aの人たちが学校に通っている子がどんな子どもたちがいるのだろうか、また学校は何を求めているのか、家庭に何が求められているのか、など考えていただければと思う。	
持続可能性	11	これから開かれた学校づくり協議会が続けられるのかどうか、まずそこがすごく心配だし、立ち上げたはいいいけれども、継続していくということが今後の課題。	5,13,15
	12	せっかくすごくいいものができているので、長く続けるためには、やはり楽しさのエッセンスで人を集めることを何か考えてみたい。	
協議会の趣旨	13	皆さんが知恵を絞りながら、地域の子どもたちを育てていくというのが趣旨なので、誰かが忙しくなったり、誰かが大変になったりして、子どもの姿が見えないような状況をつくるのはいけない。	7
校長の役割	14	学校長は2つの機能を有する。校長先生もいちメンバーですので、校長先生ももちろん提案するし、委員も同じように提案するという関係。	7
	15	イメージ（案）の資料4－2の図の中で校長も協議会の一員なのだというのが見目でわかるようにしていただいたほうがいい。	
	16	この仕組みを運営するときに、校長自身も委員として必要である。	

発言分野	No.	内容	中間まとめ（案） P.
学校運営の「承認」について	17	否認した場合は、どういう扱いになるのか。⇒協議会で議論を積み重ねていった上で、最終的に承認する。否認になる場合についてはまた議論していく必要がある。	8
	18	承認という言葉を使わなくていいのであれば、確認とか、そういう言葉のほうがいいのではないか。	
	19	確認と承認は言葉の意味が異なる。認めるために何をするのか、どのようなディスカッション、意見交換をしながら、承認するに足る前提を積み重ねて承認に向かっていくイメージを持っている。	
	20	参加される委員の方々に、少なくとも何らかの言ったことに、ただ言い放しではないということを言えるように設定しておかないといけない。	
	21	委員になる人が本当にそこまでの技量を持った人、そういう人の集まりであればいいが、承認というのは重過ぎる。	
	22	批判して、もまれて、それで案をよくしていこうという過程が必ず伴ってくるので、そういう意味では、否認する、承認するという作業は必要なのではないか。単なる確認というよりは、合意形成の意味合いを含んだ承認という言葉が適しているのではないか。	
	23	学校の使っている言葉は特殊な言葉が多い。文言の修正だとか、若干のそういう見やすさなどを協議会で考えるだけでも、学校にとっても非常にメリットである。それは理解していただくという意味で承認であれば、学校にとってもすごく大切なことだと思う。	
	24	確認をしていくという過程を通して承認していく、合意形成をしていく、そういう表現がいいのではないか。	
	25	承認ということについては、責任と一緒に考えて考えなければいけないのではないか。うちの学校の子どもを、あるいは地域の方々も、学校というのは何をやっているのだという問題意識を持ってください、といった中の教育課程の開きぐあいと理解している。子どもの教育活動を見て、校長先生が理念としてやっている教育活動や先生方がやっていること、地域の人でも、ある意味で対等な関係で承認し合って責任を持つということなのではないか。	
	26	否認について、認めながらということは当然あっていいわけで、それをお互いに、この点で認められないから改善してほしいということはあるし得る。	
	27	まとめ（素案）において、「委員全員一致」となっているところは、外したほうがいいのかもかもしれない。制度的な安定性を考えても、全会一致に承認しないといけないとなると、これは確かにハードルが高くなる。ここは「委員の合意」ぐらいの書き方にしておいたほうがいいのか。	
	28	「承認」にいくまでのステップがある。図ではこういうふうに平面的になっているが、絡んで立体的というか、「承認」というある意味フィフティ・フィフティの関係の中で議論しながら、3つの議論を通して「承認」に至る。そういう図の説明を綿密にやっていくとわかるのではないか。	
協議会の意義	29	様々な地域団体それぞれがそれぞれの仕事や役割を行っている中で、あえて開かれた学校づくり協議会で何をするのか。	8
	30	校長が最終責任者だし、決断しなければいけない。誰だって、厳しい決断をあまりしたくない。でも、そのときに、開かれた学校づくり協議会があって、学校評議員でもあるが、質問とか意見を言っていたきながらも理解していただけているというのは、校長にとって本当になくってはならないもの。	
教員の任用	31	任用については特定の教員を変える話ではなく、その学校の特性や状況、あるいは地域性などを踏まえて、どういう教員像が必要なのかについて意見を述べるものである。現時点では言葉足らずだと思うので、そういったことも中間まとめにしっかりと記載していく必要がある。	8,9
委員の選定・定数増・任期	32	いろいろな立場の人からの意見を学校の教育、子どもを育てることに対して交換する場になると思うので、先生方への気持ちの上でのお手伝いということになるのではないかな。もうちょっと地域の人がかかわり、みんなで考えましようという会になることが教育現場の負担の軽減になっていくのかもかもしれない。意見を言う立場はどんな人でもいいわけではない。長い目で見て、ここに入る人もいろいろ学んでいくとか、もっと知りながら、内容をもんでいかなければいけない場になる。	9,10
	33	地域コーディネーターではない残りの委員の方が、本当に手を挙げてくださるか。協議会の方なら参加したいという保護者の方がたくさんいるのかどうなのかは見てみたい。	
	34	P T Aの役員でさえ決めるのが大変なときに、手を挙げてくれる人がどのぐらいいるのだろうか。	
	35	委員のジェンダーバランスや多様な意見あるいは多様な考え方を学校はどういうふうに向けるのか。考える一つの間として、この提案は重要だと思う。	
	36	任期でかわった方外してしまうのではなくて、図で言うと、開かれ協議会の中に入っている人たちが委員を退任されたら、地域のほうに戻って、参画や提案をする人たちにちゃんとつながることが重要。	
	37	イメージ図の協議会の中に人が集まる仕組みが必要。ここに人が集まらないことには、任期を決めても次の人が入ってこない。みんなでやりたいと思えばどんどん回っていく。	
地域コーディネーターの複数配置	38	地域コーディネーターが全部にかかわってしまうということは負担が多くなっている。特定のサポーターだけではなく、みんながサポートできるような地域にしていけたら。	12
地域住民等の参加度	39	イメージ図のカテゴリーに入らない白地の部分の人にいかにかかわるかという魅力がないといけないのかなと思う。	13
協議会の内容	40	ざっくばらんに学校と地域と保護者で話ができるようになればいい。特に地域の中でも、「あの子今大変なのだけれど、先生方、わかっているのかな」、「私が言いにいこうかな」など、そういう雰囲気や関係が協議会があってもいいのではないかな	12,13,15
	41	開かれた学校づくり協議会の方々というのは、一番のよき理解者であってほしいし、状況に応じて、例えば部活動の指導員がどうしても足りない、応援してほしい、そういうのを地域コーディネーターの方に投げかけた場合に、開かれた学校づくり協議会の委員の方に相談して、いろいろなつてを使って、いろいろな情報を集めながら対処してきていただいている。ものすごくありがたい。それをどう組織化していくかということで、形ありきになってしまうと、その型にはめなくてはいけないのではないかなという変な誤解がないように、柔軟に対応していける配慮があってほしい。	
協議会の広報	42	開かれた学校づくり協議会の認知度を上げる取り組みというのは、新しい仕組みができる前からもできるなので、まずそれを1回やらなければいけない。仕組みの理解とか周知とか、見える化は今ですぐにでもできることである。	14

発言分野	No.	内容	中間まとめ（案） P.
協議会の開催方法	43	委員の多様性も求められる中で参加するには、開催する日時、いつこの会議をやるのか、日時や参加する方法をしっかりと考えることで、より参加しやすい環境を整えてあげることも参加する一つのきっかけになる。	15
市の支援	44	市の方がしっかりとバックアップするか、中心になって入ってるでやっていただかないと、恐らくこれは絵に描いた餅になってしまうのではないかと。武蔵野市がここにどうかかわるかというところをしっかりと明確にしていきたい	15
	45	人に充てる予算をしっかりと確保してそこを担保していくことは、まず市の一つの役割。どの地域でも参照できるガイドラインをこれからつくっていき、その中で地域の独自性をしっかりと保ちつつも、全体の標準的な姿を示す。その運営が難しい地域について、市の担当のほうでもサポートしていく。	
	46	ジャンボリーがここまで長く続いているというのは、児童青少年課をはじめ市の方がすごくバックアップしているから。そのおかげで49年間地域のボランティアの活動が続いている。あれだけ責任も重いにもかかわらず続いている。ここに関しても同じように、市の方のバックアップがなくては続かない。実務はなるべく市のほうでやっていただけると、地域のほうもどんどんいい人が入ってくれると思う。	
	47	副校長をサポートするという方が各校いる。それと同じような仕組みで、各学校にそういう方を採用していただくようにしたらいいか。	
	48	実務についての②の「運営にかかわる費用や予算について」では、お金がかかわるということは会計が必要ということか。⇒ 今は教育委員会が実施することを想定している。	
	49	コミュニティスクール実施自治体で事務局機能が学校側になっていて本当に大変だと聞く。協議会を回すのでかえって忙しくなってしまうことがあるので、教育委員会としても、切り分けるような形を考えてもらえると非常にありがたい	
事務局の担い手	50	学校長が推薦するとのことですが、実務は誰がするのか。結局副校長がやるとなると、副校長を誰もやりたがらないのではないかと危惧する。	15
市民自治	51	武蔵野市というのは、これまで市民の方々が自分たちの問題をいろいろな形で対応しようとしてきた歴史があり、コミセンもまさにその1つ。それから青少協などいろいろなところがあるが、市民自治という形で問題を考えていこうとしてきた。武蔵野市だからこそ、こういった仕組みを生かすことができるはずではないか。	15